『日本英語教育史研究』 投稿論文標準書式

投稿論文はワープロソフトを用いて、次の書式によって作成し、提出するものとする。

1. 用紙はA4判を用いる。余白は上下左右とも30ミリとする。
2. 本文の文字のサイズは12ポイントとし、1行あたり、和文の場合は38文字、英文の場合は76文字、いずれも1ページ28行とする。注、参考文献の文字サイズは、10.5ポイントとする。なお、英字・数字はすべて半角文字とする。
3. フォントは、和文は明朝体、英文はCenturyを用いる。
4. 和文のタイトルに副題を付す場合は、主題の後に全角コロンを付ける。
5. 和文の場合、句点は「。」(マル)、読点は「,」(コンマ)を用い、句読点やカッコは全角文字とする。
6. 見出しは、和文・英文ともゴシック体を用い、その前後に1行の空白を設ける。
7. 第1ページの冒頭8行分に、①論文題目、②論文題目の英訳または和訳、③執筆者名とそのローマ字表記(例 TAKENAKA, Tatsunori)、④日本語または英語のキーワード3語を、①～④の順に記す(ただし、③は正本のみ)。9行目から100～150語の英文アブストラクト、続けて本文を記すこととする。
8. 提出原稿にはフッターにページ番号を付すこと。
9. 引用方法、注、および参考文献の記載は、次の例を参考にすること。

引用方法

- (1) 参照した文献に言及する場合、文中に「著者名(出版年)」もしくは文末に「(著者名, 出版年)」のいずれかの形で示す。

例1) 神保(1911)は、独案内を含む独習書を好意的に捉えた。

例2) 刊行された訳注書は160点以上を数え、1887年がピークという(江利川, 2000)。

- (2) 文献の記述の一部を直接引用するときには、「」で囲み、直後に括弧を用いて引用ページを添える。引用が4行を超える場合は、「」を用いず、2字下げの別行とする。その前後には空白行を入れない。

引用を導入する文に著者名（出版年）を記していない場合は、引用の末尾に著者名、出版年、引用ページを添える。

例 1) 岡倉（1911）は「最初の洋学研究者が、漢文の学び方を踏襲した為、今日まで餘弊風を為して、是より他に解釈の方法は無いと思はれるに至つたのは、嘆ずべくもあり、亦憫笑すべきことでもある」（p. 121）と述べている。

例 2) 「英語の各単語に訓を施して、返り点によって語順を示す訓点本」(森岡, 1999, p. 108) と説明されることもあり、しばしば「虎の巻」と呼ばれる。

例 3) この点は竹原（1934）に次のように記されている。

既成四十有余の基本語表を蒐集し、これが比較研究をなした結果、これらの諸表を合併して一種の総合基本語表を作成し、これが公刊を企図したのである。たまたま昭和七年海外出張を命ぜられた際米国においてソーンダイク博士の改訂基本語表を見るに及び、この改訂版において私の目的がある程度まで果たされていることをさとり、同博士及び同書の出版元たるコロンビア大学出版部の許可を得てその日本版を発行するに至つたのである。（pp. 3-4）

注

注を加える場合は、本文中の該当箇所にも右肩数字を付ける。なお、脚注、尾注、いずれも可とする。

例：本文)

森が発音表記においてより正確を期したのは、この本を手にする生徒が声に出して読めるようになり、また、それを聴いて書き取れるようになるためではなかったか。タイトルに「正則」と付けた理由もそこにあるかもしれない⁶⁾。

例：注)

6) 惣郷（1970）は独案内のタイトルについて、「正則とあるのは発音を正則にしたといういみ」（p. 328）と述べている。森のものを含め、タイトルに「正則」を冠した独案内は多い。

参考文献

論文の末尾に載せる「参考文献リスト」は、原則として本文中で引用・参照された文献とし、掲載順序は和洋の文献を区別せず、著者の姓のアルファベット順に配列する。

(ア) 単行本の場合

小篠敏明 (1995). 『Harold E. Palmer の英語教授法に関する研究: 日本における展開を中心として』
第一学習社.

Swinton, W. (1880). *Studies in English Literature*. New York: American Book Company.

(イ) 紀要等の論文の場合

青木庸效 (1991). 『高等科英語』とその周辺 『日本英語教育史研究』 6, 283-287.

Nassaji, H. (2003). L2 Vocabulary Learning from Context: Strategies, Knowledge Sources, and Their Relationship with Success in L2 Lexical Inferencing. *TESOL Quarterly*, 37, 645-670.

(ウ) 単行本の中の論文の場合

大門正克 (1993). 「農村から都市へ: 青少年の移動と『苦学』『独学』」 成田龍一 (編) 『近代日本の軌跡 9 都市と民衆』 吉川弘文館, 174-195.

Swain, M. (1998). Focus on Form through Conscious Reflection. In Doughty, C. & Williams, J. (Eds.), *Focus on Form in Classroom Second Language Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press, 64-81.

(エ) 筆者が複数の場合

Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitude and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, Mass: Newbury House.

高梨健吉・大村喜吉 (1975). 『日本の英語教育史』 大修館書店.

(オ) 同じ著者による同発行年の文献の場合

Palmer, H. E. (1936a). The History and Present State of the Movement towards Vocabulary Control. *I.R.E.T. Bulletin*, 120, 14-17.

Palmer, H. E. (1936b). The Art of Vocabulary Lay-out. *I.R.E.T. Bulletin*, 121, 1-8.

高梨健吉 (1985a). 『文明開化の英語』 中央公論社.

高梨健吉 (1985b). 『英語の先生、昔と今: その情熱の先駆者たち』 日本図書ライブ.

(カ) インターネットからの引用の場合

外国語教育史料デジタル画像データベース作成委員会 (2003). 「明治以降外国語教育史料デジタル画像データベース」(平成 18 年度科学研究費助成研究) 外国語教育史料デジタル画像データベース作成委員会. 2010 年 4 月 20 日検索. <http://www.wakayama-u.ac.jp/~erikawa/database2/>

Smith, R. C. (1999). *The Writings of Harold E. Palmer: An Overview*. Tokyo: Hon-no-Tomosha. Retrieved August 18, 2010. <http://www.warwick.ac.uk/~elsdr/WritingsofH.E.Palmer.pdf>

(キ) 口頭発表ハンドアウトの場合

Anderson, V. (1991). Training Teachers to Foster Active Reading Strategies in Reading-Disabled Adolescents. Paper Presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association, Chicago. (1991, April).

江利川春雄 (2009). 「英語通信教育の歴史(3): 欧文社通信添削会を中心に」日本英語教育史学会第 225 回月例研究会口頭発表ハンドアウト (2009 年 11 月).

(ク) 原典とともに翻訳も参照した場合

Ichioka, Y. (1988). *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*. New York: Free Press. [富田虎男・桑井輝子・篠田左多江 (訳) (1992). 『一世: 黎明期アメリカ移民の物語り』刀水書房.]

(翻訳のみを参照した場合)

イチオカ, ユウジ (富田虎男・桑井輝子・篠田左多江 訳) (1992). 『一世: 黎明期アメリカ移民の物語り』刀水書房.